琉球大学学術リポジトリ

紀元前2千年紀の閩江下流域

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-01-15 キーワード (Ja): 紀元前2千年紀, 閩江下流域, 沿海ルート, 丸底釜 キーワード (En): 作成者: 後藤, 雅彦, Goto, Masahiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33089

紀元前２千年紀の閩江下流域

後　藤　雅　彦
Masahiko Goto

The Lower Reaches of Minjiang in the Second Millennium B.C.

キーワード：紀元前２千年紀、閩江下流域、沿海ルート、丸底釜

はじめに

中原において初期王朝が形成された時期に併行して、紀元前２千年紀中頃、東南中国沿海側においては福建黄土龠文化、珠江三角州の東澳湾遺跡、茅崗遺跡を代表とする文化遺存が、内陸側では広東の石峡中層文化が展開する（第１図）。これら諸地域文化に共通して、幾何形紋をもつ硬質の土器（印紋陶）が出現し、凹底罐複合と呼ばれる土器文化が展開する（中村慎一1996）。中村氏は凹底罐複合を殷系文化の拡大によって、それに対峙するように成立したと論じた。また、西江清高氏（2003）も「「越」との関連が指摘されるこの印紋陶の分布圏は、その全体が政治的なまとまりを形成することはなかったが、中原王朝と対峙する形で圏内の文化要素の共通性を顕在化」させたと論じた。このような共通性が認められる一方、東南中国の諸地域文化の在地性が見直されている。呉春明氏（2003）は東南沿海地域における地域文化にみる北方文化要素の伝来と融合について論じている。まず、当該時期について中原北方諸青銅文化の強烈な浸透のもと、土器では雲雷紋、回紋、広折肩、丸凹底などを北方文化の要素として認めている。一方、曇石山文化下層類型からみられる丸底釜と支脚のセット関係による煮沸形態が中層類型から当該時期の上層まで継続し、黄土龠類型の甗（甑と煮沸器が一体化した土器）下部形態

もこの丸底釜の系統にあることを指摘している。

このような紀元前２千年紀における東南中国の先史文化の動向として、長江下流域から東南中国は印紋陶と呼ばれる土器文化が各地で共通して展開し、周辺地域との地域間交流が活発であったと同時に、在地文化の連続性が認められる。そこで、本稿では閩江下流域を中心に東南中国の代表的な煮沸土器である丸底釜の変化と甗の導入を整理しながら紀元前２千年紀という中国初期王朝形成期における地域文化の変容について検討を加えたい。

第１図　紀元前２千年紀の東南中国

（→印は沿海ルートを示す）

Ａ：閩江下流域

１：山前山遺跡，２：獅子崗遺跡，３：黄瓜山遺跡，４：海壇島

５：石寨山遺跡，６：東澳湾遺跡，７：茅崗遺跡

なお、東南中国の時代区分として筆者は紀元前4000年以前の土器を伴わない文化遺存をⅠ期として、縄蓆紋土器を代表とする文化遺存をⅡ期、曇石山文化などの新石器時代後期をⅢ期、紀元前２千年紀以降をⅣ期にしている。

１．紀元前２千年紀の閩江下流域の諸遺跡

最近の研究成果をもとに中国社会科学院考古研究所（2003）が編集した『中国考古学　夏商巻』において、第８章に「夏、商王朝周辺地区の考古学文化」があげられている。その中で福建東部沿海地域は閩江下流域を含むが、考古学文化として黄瓜山文化と黄土侖文化が設定されている。黄瓜山遺跡のＣ14年代にはＢＰ3915±60年があり、黄土侖遺跡ではＢＣ1640～1225年の測定値がある。

黄土侖文化は黄土侖遺跡（福建省博物館1984a）を標準遺跡とする。黄土侖遺跡の層序は第１層の表土、第２層の唐宋文化層、第３層の印紋硬陶文化層が確認され、当該時期においては19基の墓葬が確認されている。報告は墓葬資料がほとんどであり、土器以外の遺物については詳細が不明である。墓葬は長方形を呈する竪穴土坑墓で、人骨は残存していない。１基を除き全ての墓葬に４点から21点の副葬品がみられ、また副葬器物の組合せとして、杯・圏足鉢・罐または壺があり、とくに杯はほとんどの墓葬に副葬されている。黄土侖遺跡の報告は墓葬出土土器を中心としたものであり、土器は幾何形印紋硬陶を主体とし、さらに三角形や回字形の刻線紋が特徴的である。生活址である浮村遺跡（曽凡1958）の出土土器も、印紋硬陶が全体の63％を占める。紋様は方格紋が最も多く、雲雷紋がみられる。

この黄土侖文化に先行し、前述した黄瓜山文化に相当する時期の閩江下流域については、従来、曇石山遺跡の第６次調査上層遺存があげられていたが（福建省博物館1976）、撹乱を受けていることも指摘されていた。それに対し、荘辺山遺跡が1980年代前半に発掘調査が実施され、その報告が発表された。

層序は４層に区分され、第３層（上層文化）が曇石山上層文化に相当する。荘辺山遺跡上層は遺構も伴い、前段階の中層文化との継承関係を示す上でも有効であるといえる（福建省博物館1998）。

これによって、福建における新石器時代から青銅器時代への移行期として荘辺山上層類型が設定され、その分布範囲を閩江下流域と福建東部とし、その中で黄瓜山遺跡（福建省博物館1994）を典型的な遺跡として位置付けている（盧美松・陳龍2003）。ただし考古学文化の名称は一定せず、別に黄瓜山類型文化、東張文化が命名されている。最近では、福建省博物院（林公務氏2003）が福建省における考古学研究を総括する中、閩江下流域を含む東部沿海地区において新石器時代中期（遅い段階）の殼坵頭文化→新石器時代後期の曇石山文化→新石器時代末期の黄瓜山類型文化と時間的変遷を示している。ところで最近、曇石山遺跡の第８次調査の詳細な報告が刊行され、層序的に新石器後期文化の曇石山文化層の上に、第３期（黄瓜山文化相当）の文化層、その上に第４期（印紋硬陶と釉陶を含む文化層で黄土龠文化層相当）が確認されている（福建省博物院2004）。こうした層序関係は1960年代の東張遺跡の調査（福建省文物管理委員会1965）によっても、層位は３層に大別され、下層は夾砂陶と泥質磨研陶を主体とし、中層は印紋硬陶が増加し、橙黄陶、彩陶が出現、上層は印紋硬陶の他に灰釉陶器と青銅器が出現する変遷過程が示されており、閩江下流域では層序的に当該時期の考古学文化の変遷をたどることができる。

２．丸底釜の変化と甗の導入

厳文明氏（1994）は主要な３系統の文化の相互関係から中国文明の形成が捉えられることを提唱する中、「東南系統」は稲作経済区として、煮沸土器では鼎が特徴的であるとした。しかし、東南系統の沿海部である閩江下流域・珠江三角州においては新石器時代を通じて釜が主体で、鼎が一般化していな

い。これは「東南系統」における地域差を示すものであり、西江清高氏（1995ａ）は、釜が長らく継続する分布域が土器製作における「叩き技法」の分布と重なることから、釜文化系統を加えている。

ここで丸底釜の変化について整理してみると、荘辺山遺跡上層（第２図１～４）では曇石山文化の特徴的な折腹で浅腹形が継続するが、曇石山遺跡第３期では浅腹形（同５）に深腹形（同６）が加わり、この器形は第４期まで継続する。東張遺跡上層でも図化された釜（罐）には曇石山文化に通じる浅腹形（同22）と曇石山第3期に出現した深腹形（同21）の両者がみられる。これによって、閩江下流域では同時期、釜の深腹化が進行したと考えられるが、曇石山文化に系譜が求められる浅腹形が消失したわけでなく、第４期まで継続している点も看過できず、こうした丸底釜にみる形態的な差異は煮沸土器としての使い分けも考慮にいれるべきであろう。とくに曇石山遺跡第３・４期の深腹形は大型になっている点も注意される。

また、福建東部沿海地域の黄瓜山遺跡では下層から上層にかけて、曇石山文化にみられる腹部の突帯紋がめぐる丸底釜（同13～20）が継続している。これらの丸底釜も閩江下流域ほど顕著ではないが深腹化が進んでいる。

ところで、東南中国の煮沸形態として、丸底釜と支脚のセット関係が指摘されており、Ⅱ期の殻坵頭遺跡では両者の出土例があるが、新石器時代後期の曇石山文化の各遺跡報告書では、支脚資料の提示がみられないのが現状である。それに対し、閩江下流域の荘辺山遺跡上層、曇石山遺跡第３期や福建東部沿海地域の黄瓜山遺跡下層でも支脚の報告事例があることは、前述した煮沸土器の変化とともに注意される点であろう。それも猪頭形、Ｙ字状形という形態的な共通性が認められる。また黄土龠文化に属する古洋遺跡でも、灰坑（土坑）から支脚とともに釜が出土していると報じられている（福州市文物考古工作隊2003）。残念ながら釜自体の詳細な報告はなく、丸底釜の当該時期については明らかでない。

そして、閩江下流域では曇石山遺跡第４期（同７・８）に甑が出現し、他

第２図　煮沸土器

１～４：荘辺山遺跡上層（福建省博物館1998），５・６：曇石山遺跡第３期
７～10：曇石山遺跡第４期（福建博物院2004），11～20：黄瓜山遺跡下層
（福建省博物館1994），21・22：東張遺跡上層（福建省文物管理委員会1965）
23･24：黄土侖遺跡（福建省博物館1984）

に黄土侖遺跡（同23・24）、渓頭遺跡上層に出土例がある。福建東部沿海地域では黄瓜山遺跡下層（同11・12）から出現し、上層まで継続する。さらに北側では浙江南部でも甗の出土事例が報じられている（浙江省文物考古研究所他1999）。しかし、閩江下流域では先行時期となる荘辺山遺跡上層、曇石山遺跡第３期では確認されていない。

東南中国で出現する甗について、甑をのせる煮沸器の諸形態（釜・鼎・鬲）が当該地域の東南中国の地域性を示す指標としてとりあげられている（中村1996・西江1995b）。また、最近の研究では劉茵氏（2003）は中原地区の新石器時代後期から商周時代の煮沸土器である袋足甗に足し、東南中国の印紋陶文化に出現する甗が丸底を特徴とする点を整理している。

まず、長江下流域における煮沸土器の変遷について、中村慎一氏（2002）によると、河姆渡文化では釜が主体で、馬家浜文化に鼎が定着化するようになり、崧沢文化期になると鼎の数量が増大し、後半では甑や鼎の内壁中段に突稜がめぐるものが出現する。そして良渚文化期になると鼎と甑が合体する鼎形甗が出現する。この鼎形甗は後続時期の馬橋文化（上海市文物保管委員会2002）に継承される。

一方、東南中国ではⅣ期になると、江西万年類型から閩江流域（下流域・上流域）において釜と一体化する釜形甗が出現する。これは、閩江流域がもともと鼎の発達しない地域であることと関係している。さらに閩江下流域の釜形甗の形態は上流域と異なり、腹部が屈折する折腹釜で、曇石山中層文化の特徴的な釜の形態を踏襲するものである。このように甗という新しい器物を作る過程において、甑と下部の煮沸器を一体化するというアイディアの共有化が東南中国でも閩江下流域から沿海ルート上では福建東部沿海地域や浙江南部まで、内陸ルートで閩江上流域から江西まで広がる点に、その背景としての広範囲な地域間交流がうかがえる。それと同時に実際に用いられる器物の選択にみる個別化が捉えられ、すでに諸氏が指摘するように、個別化の背景には在地的要素の継続をよみとることができるのである。

３．荘辺山上層類型の形成と展開

すでに研究史でも触れたように、当該時期は新石器時代後期の曇石山文化から青銅器時代への移行期として位置付けられていた。ここで改めて荘辺山上層類型の位置付けについて整理してみると、丸底釜は荘辺山上層類型から黄土龠文化の甗下部形態にみるように曇石山文化以来の在地系要素の継続として評価されるが、この継続性と同時に荘辺山上層類型から深腹化が進行するという丸底釜の変化がみられる。そして、深腹化という方向性が閩江下流域と福建東部沿海地域に共有される点は当該時期における地域間交流の活発化を示すものと考える。

また、当該時期を代表するもう一つの要素である彩陶の広がりに着目すると、東南中国における文化変容期における沿海ルートが果たした役割の明確になる。とくに凹底罐複合が形成される直前、閩江下流域から浙江南部を中心に彩陶を指標とする沿海地域間の交流が活発化したと考える。

楊琮氏（1997）は福建の先史文化の中で、紀元前２千年紀以降において、その分布的視点から、先史文化を沿海類型と内陸類型に区分しているが、この彩陶を特徴とするのが沿海類型である。

彩陶についての最近の研究として郭素秋氏（2003）の論考があげられる。郭氏は荘辺山上層類型の彩陶の系譜と展開をまず閩江下流域の曇石山文化から黄土龠文化までの時間的な変遷の中で位置付けるという「縦の比較」、さらに浙江南部などの周辺地域との比較という「横の比較」を行っている。その結果、荘辺山上層類型の彩陶の主要な分布域として、閩江下流域－福建東北部（本稿の福建東部沿海地域）－浙江南部とし、それらの地域間に土器の胎土や彩紋の精粗、共伴する土器（後続する黄土龠文化期以降に通じる要素の有無）によって差異があることを指摘し、閩江下流域の彩陶が福建東北部や浙江南部より古く、荘辺山上層類型が新石器時代の曇石山文化を直接的に継承したものであることを論じた。

このように閩江下流域の考古学文化の時間的変遷を整理すると、新石器時代後期の曇石山文化から荘辺山上層類型を経て黄土龠文化へと連続的な変化が認められ、本稿ではⅣ期前半として荘辺山上層類型、Ⅳ期後半として黄土龠文化を設定することにする。そして、Ⅳ期前半の福建東部沿海地域の黄瓜山類型は、同地域における先行時期の様相が明らかではないが、前述した沿海地域間の交流が活発化する中で形成された地域文化であると捉えておきたい。

ここで、東南中国に共通する要素である凹底罐の導入を検討してみると、閩江下流域においてⅣ期前半の荘辺山遺跡上層から凹底が出土している（第３図１）。これは底部を中心とした破片資料であり、器形の詳細は不明であるが、施紋範囲は底部から腹部下部を中心としたものである。また、盆形土器にも凹底がみられる（同２・３）。そして、曇石山遺跡第３期では盆形土器（同４）に凹底がみられ、第４期に凹底罐（同５）が出土している。また、類似した土器が第６次調査資料にも認められる（同６・７）。これらの土器の印紋は底部から腹部下部に施されている点は、凹底罐の導入が荘辺山遺跡上層期から、施紋方法を含む土器製作技術の変化として凹底化が開始したことを示すものではないだろうか。それが、黄土龠文化期になると凹底罐以外に、比較的多くの器種（壺類）に凹底がみられ、印紋が器物全面に施されると同時に凹底化が定着したと考える。すなわち、凹底化は荘辺山上層類型を萌芽期として、その後、印紋陶の土器文化の展開とともに多様化する傾向が認められる。今後、東南中国各地における凹底の導入過程を比較することが必要であるが、黄土龠文化期に東南中国に広範囲に共通性を生みだす背景としての凹底化という土器製作技術の共有化が問題となってくるものと思われる。そして、その範囲は甗の導入と合わせて河川水系単位で沿海地域と内陸地域が結びつくより広いものであったと考える。

これによって移行期としての荘辺山上層類型は、閩江下流域における新石器時代後期からの地域文化の連続性とともに、紀元前２千年紀における東南

中国における共通性が生まれる萌芽期としての位置付けが明確になったと理解される。そして荘辺山上層類型は沿海ルートによる周辺地域との関わりを深めながら、地域文化自体の変容が進行し、やがてⅣ期後半になってさらに沿海ルートと内陸ルートが連携することによって、東南中国に広く共通性が認められるようになると考える。

次に、こうした時間的な変遷を明らかにした上で、紀元前２千年紀における社会的側面の変化として、遺跡の動態と生業基盤としての稲作農耕からみた周辺地域との関わりについて、限られた資料ではあるが検討したい。

第３図　凹底土器

１～３：荘辺山遺跡上層（福建省博物館1998），４：曇石山遺跡第３期，５：曇石山遺跡第４期（福建博物院2004），６・７：曇石山遺跡第6次調査資料（福建省博物館1976）

４．遺跡の動態と稲作の問題からみた周辺地域との関わり

(1) 遺跡の動態

閩江下流域の遺跡について呉春明氏ら（1998）の遺跡分布の変化に関する研究によると、紀元前2000～1000年（本稿Ⅳ期）になると「原始集落鼎盛期」になり密集した分布をもつ広い集落形態を呈し、閩江下流域から「周辺拡張時期」に向かう。

こうした中、閩江河口対岸にある海壇島における遺跡の分布状況は興味深い。同島ではⅡ期に属する遺跡が殼坵頭遺跡も含めて５ヶ所で確認されているが、基本的に殼坵頭類型に属する遺物のみが採集され、現時点では曇石山文化期の遺跡は未確認である。しかし、殼坵頭遺跡においてⅣ期に属する印紋陶が道端の断面に露出した貝層中において採集されたことが報告されており、また印紋陶が採集されたⅣ期の遺跡は他に６遺跡があり、その中で井過関山遺跡はⅣ期前半の荘辺山上層類型に特徴的な彩陶片が採集されている。こうした遺跡の分布動向については海水面の変化についての検討が必要であるが、Ⅳ期になって海壇島が東南中国の沿海ルート上に再びくみ込まれるようになることがわかる。

前述したように荘辺山上層類型の彩陶は大陸側でも浙江南部から福建南部までの沿海ルートによる広範囲な地域間の交流を示すが、海壇島と閩江下流域の関係は近接する地域間の交流を示すものであり、ここにⅣ期において東南中国の地域間交流にあたって沿海ルートの重層性が形成されたと考える。

さらに、沿海ルートが活発化したと同時に、前述したように地域内の集落遺跡が密集した分布を示す点は地域内の遺跡の動態にも変化があったことを示すものである。こうした遺跡分布に関して、閩江下流域において集落分布から遺跡の内容を加えて、拠点的な集落を抽出できるかどうか現時点では判断は難しい。ただし、曇石山遺跡では本稿Ⅲ期とⅣ期（黄土侖文化期）において、濠溝が各々確認されている点は注意したい。

(2) 農耕をめぐる問題と周辺地域との関わり

紀元前6000年～紀元前3000年の温暖湿潤期であるヒプシサーマル期の後、紀元前3000年になると気候は乾燥冷涼化する。この気候変動は中緯度地帯から高緯度地帯においてとくに大きな影響を及ぶとした宮本一夫氏（2005）は、華中から華南にかけては、この変動期においても一定の地域文化が存続するとしながらも、華南で曇石山文化や石峡文化が成立した点について、華南の大転換とし、稲作農耕社会の形成を認めている。すなわち、冷涼乾燥期に従来の生態域が南へ移行する段階であり、「この時期に、華中から華南へ鼎などの土器様式を含めて文化複合体として稲作農耕文化が、本格的に南側に拡散していく」としている[(1)]。実際に、東南中国の内陸側については新石器時代後期の石峡遺跡のイネ資料は稲作の定着を示すものといえるが、沿海側におけるイネ資料は福建東張遺跡（福建省文物管理委員会1965）や獅子山遺跡（泉州海外交通史博物館他1961）の稲の圧痕をもつ焼土が検出されているにすぎず、しかも両遺跡は紀元前２千年紀以降に属すると考えられる貝塚を伴わない遺跡である。

新石器時代の特徴である貝塚遺跡の変化について蔡保前氏（1998）は福建省の貝塚遺跡の出現から消失までの変遷を整理し、地域によって貝塚の消失の時期が異なることから、周辺地域からの影響による在地文化の変化、農耕経済との関わりの中にその要因を求めている。

閩江下流域ではⅣ期以降、貝塚の衰退時期と考えられるが、福建東部沿海地域では曇石山上層と密接な文化関係をもちながら、貝塚遺跡が形成される。黄瓜山遺跡では、高床式の可能性が指摘されている遺構も確認されており、この場合、傾斜地にあることが注意される（後藤2002）。

このような紀元前２千年紀以降における貝塚遺跡の変化を示す背景の一つには、社会的現象としての稲作の定着を考慮すべきであり[(2)]、貝塚遺跡の動向や居住形態の多様性は沿海地域において稲作の定着にあたって、地域内の遺跡ごとによる対応の差が想定される。

また、農耕具を含めた技術的側面についての検討が問題となろうが、新石器時代からの時間的な変化を明確に捉えることは現時点では難しい。

ここで、生産工具である石器の変化についてⅡ期から連続する要素である片刃石斧を中心に整理してみると（後藤1999）、閩江下流域では曇石山文化の石器は片刃石斧が主体であり、石刀も出土石器の中で一定数を占めるが、典型的な石包丁とは異なり、その用途が問われるであろう。こうした片刃石斧主体の石器群の様相は、Ⅳ期前半も共通した傾向を示しており、同時期を代表とする荘辺山遺跡上層（福建省博物館1998）では片刃石斧（第４図１～７）の内、横断面三角形状（同１・２）が下層38％に対し、19％と減少するものの、同片刃石斧が当該時期まで、継続して使用されていたことを示す。

第４図　荘辺山遺跡上層出土石器
（福建省博物館1998）

最近、林公務氏（2003）によって、福建沿海地域の片刃石斧について、本稿Ⅱ期からⅣ期まで、統一的な分類基準（横断面形態による大分類と側面形態と平面形態による細分）によって、その時間的な変遷が明らかにされている。その中で、本稿横断面三角形状をＣ式とし、さらに横断面が扁平四辺形をＢ類とし、それらの細分型式が黄瓜山遺跡で多く認められることから、片刃石斧の細分化が黄瓜山類型で進行し、片刃石斧の主要な用途が木工用と考えられることから、この段階に木工技術の高まりを想定している。また、横断面四辺形で刃部が内凹するタイプをＤ式とし、これらが福建南部沿海地域の黄土龠文化期に併行する段階に流行すると同時に、その特徴ある刃部形態が青銅斧に継承される点を指摘している。このＤ式が黄瓜山遺跡から１点ではあるが下層から出土している。そして渓頭遺跡上層を黄土龠文化の晩期に位置付けながら、出土石器に明確な段をもつ有段石斧（ＢⅥ式）が含まれる点について、沿海地区の類例が限定され、出現期が遅れることから外来的な要素として位置付けている[(3)]。筆者も従来、東南中国を代表とする遺物の一つとされた有段石斧は東南中国でも沿海ルート上ではなく、内陸ルート上に分布するものであると考えている。また、石包丁は東南中国内陸地域にⅢ期以降出現するが、荘辺山遺跡上層から有孔直刃タイプが出土している（第４図８）。

このように閩江下流域を含む福建省の沿海地域では新石器時代以来の片刃石斧が主体的であるが、Ⅳ期になると限定的ではあるが、稲作と関わりをもつと考えられる石包丁や長江下流域から東南中国内陸地域の稲作農耕地帯で発達する有段石斧が導入されている点は注目される[(4)]。こうした外来要素の導入について、Ⅳ期後半黄土龠文化の石器群の様相が先行時期に比べて明らかでないことから、それらの定着化については現時点で判断をくだすことができないが、稲作地帯である東南中国内陸地域との文化関係を示すものと考える。そして、東南中国沿海地域は沿海ルートばかりでなく、水系単位で内陸地域との文化関係が密接であることを考えると、これらの外来要素は技術

を伴う文化影響の一つとして捉えられるのではないだろうか[5]。

まとめ

東南中国沿海地域では新石器時代以降、閩江下流域のように海と河川水系の接点である河口付近に比較的まとまりをもつ地域文化が形成され、それが中国初期王朝形成期にあたる紀元前２千年紀になると、地域的な伝統を継続しながらも、長江流域以北に展開した青銅器文化の影響のもと地域ごとに主体的な変容をとげ、周辺地域間の交流を通じて情報・技術の共有化がすすみ、その結果、東南中国にひろく共通性が生まれる。

こうした地域文化の変容を段階ごとに跡付け、より具体的に在地文化の連続性と東南中国に広くみられる共通性を捉えるために、本稿では東南中国の在地要素の変化に着目した。その結果、Ⅳ期前半において新石器時代以来の丸底釜が連続性を示すと同時に新たな器形を生みだし、片刃石斧も地域文化の伝統を継続しながら、形態の細分化と青銅斧に通じる新たな形態を生みだすという変化を捉えることができた。そして、これらの変化の共有化と荘辺山上層類型の彩陶の広がりによって、閩江下流域が東南中国の沿海ルートによる文化交流の流れに組み込まれていく過程が示された。

また、紀元前２千年紀の沿海ルートによる文化交流は、浙江南部から厦門、あるいは対岸の台湾を含む複数の沿海地域をとり囲む広範囲なものであるが、閩江下流域と河口対岸の海壇島の関係のように隣接する沿海地域間の近距離交流も活発化している点は看過できない。ここに、沿海ルートの重層性をよみとることができるのではないだろうか。

東南中国沿海地域には、複数の河口部周辺という中心地が点在しながら、それらが結節点となり、より広域な沿海ネットワークを形成していたと考えられるが、今後、東南中国における地域間交流の解明についてはこうした沿海ルートの重層性とさらに内陸ルートとの関連性から積み上げていくことに

よって、その実態に迫ることができるであろう。

本稿は平成16年度から実施している科学研究費補助金基盤研究（C）「紀元前２千年紀の南中国と琉球列島の考古学研究」による研究成果の一部である。

註

1．広東省英徳牛欄洞遺跡では前１万年前後の土器資料が確認されていると同時にイネのプラントオパールも第２・３期文化層から検出されたことが報じられている。しかし、中村慎一氏（2002）はプラントオパールの検出状況から稲作開始を論じるには資料として心許ないとし、更新世から完新世への転換期に中・小型動物の狩猟の活発化、水産資源と植物質食料の利用が開始され、食用としての野生イネの利用も「多角的資源開発の一環」として開始された可能性を指摘している。

2．東南中国の稲作の定着について小柳美樹氏（1999）は、「野生イネが生育する華南地方における稲作農耕の定着も、新石器時代晩期以降の良渚文化や印紋陶文化の波及によって生じた社会的現象」であり、「新しい外来的要素の一つとして、稲作農耕（コメ食文化）が導入され」、その後の稲作の定着は「勃興した都市への食糧供給の高まり」に対応した社会的側面を指摘している。

3．渓頭遺跡（福建省博物館1984）では橙黄陶や彩陶がみられないが、次の印紋硬陶遺存の黄土龠文化に通じる要素が多い。筆者（1991）はⅣ期前半を東張類型（本稿の荘辺山上層類型）と渓頭類型に区分し、地域文化の変容にあたって遺跡間の差異を捉えようとしたことがあるが、やはり時期差として捉えることが妥当であろう。

4．横断面三角形の片刃石斧は浙江省南部の飛雲江流域においても分布し、同地域ではこれらと共に台湾の円山文化に類似する打製石斧や打製石刀がみられる。

５．本稿では東南中国沿海地域として閩江下流域を中心に福建省沿海地域をとりあげたが、今後、珠江三角州地域やⅣ紀後半の広東東部から福建南部に分布する浮浜文化などの沿海地域との比較が必要である。

引用文献

郭素秋 2003「福建荘辺山上層類型彩陶的源流及其與浙南地区的関係」『中央研究院歴史語言研究所集刊』74－３

厳文明（岡村秀典訳）1994「中国古代文化三系統説」『日本中国考古学会会報』第４号

呉春明 2003「東南沿海史前史序列中北方文化因素的伝入與融合」『第三届国際漢学会議論文集　史前與古典文明』中央研究院歴史語言研究所

呉春明・林果 1998『閩越国都城考古研究』厦門大学出版社

後藤雅彦 1991「中国東南部の先史文化－福建・曇石山文化を中心に－」『史学研究集録』第16号

後藤雅彦 1999「東南中国の片刃石斧考」『古代』第107号

後藤雅彦 2002「東南中国の貝塚遺跡」『琉球大学法文学部人間科学科紀要人間科学』第10号

小柳美樹 1999「稲と神々の源流－中国新石器文化と稲作農耕－」『現代の考古学３　食料生産社会の考古学』朝倉書店

蔡保全 1998「従貝丘遺址看福建沿海先民的居住環境與資源開発」『厦門大学学報（哲社版）』1998－３

上海市文物管理委員会 2002『馬橋1993－1997年発掘報告』上海書画出版社

浙江省文物考古研究所他 1999「浙南飛雲江流域青銅時代文化遺存」『東南考古研究』第２輯

泉州海外交通史博物館他 1961「福建豊州獅子山新石器時代遺址」『考古』1961－４

曽凡 1958「福州浮村遺址的発掘」『考古学報』1958－２

中国社会科学院考古研究所 2003『中国考古学夏商巻』中国社会科学出版社
中村慎一 1996「良渚文化の滅亡と「越」的世界の形成」『文明の危機－民族移動の世紀』（講座文明と環境5）朝倉書店
中村慎一 2002『稲の考古学』同成社
西江清高 1995ａ「中国先史時代の土器作り」『しにか』1995－７
西江清高 1995ｂ「印紋陶の時代の中国東南部」『日中文化研究』第７号
西江清高 2003「先史時代から初期王朝時代」『世界歴史大系　中国史１』山川出版社
福建省博物館 1976「閩侯曇石山新石器時代遺址第六次発掘簡報」『考古学報』1976-1
福建省博物館 1984ａ「閩侯黄土侖遺址発掘簡報」『文物』1984－４
福建省博物館 1984ｂ「閩侯渓頭遺址第二次発掘報告」『考古学報』1984－４
福建省博物館 1991「福建平潭殼坵頭遺址発掘簡報」『考古』1991－７
福建省博物館 1994「福建霞浦黄瓜山遺址発掘報告」1994－２
福建省博物館 1998「福建閩侯荘辺山遺址発掘報告」『考古学報』1998－２
福建博物院（林公務）2003「福建考古的回顧與思考」『考古』2003－12
福建博物院 2004『閩侯曇石山遺址第八次発掘報告』科学出版社
福建省文物管理委員会 1965「福建東張新石器時代遺址発掘報告」『考古』1965－２
福州市文物考古隊他 1995「1992年福建平潭島考古調査新収獲」『考古』1995－７
福州市文物考古工作隊 2003「福建閩侯古洋平崗先秦遺存的発掘」『東南考古研究』第３輯
宮本一夫 2005『中国の歴史01　神話から歴史へ』講談社
楊琮 1997『閩越国文化』福建人民出版社
劉茵 2003「東南印紋陶文化中的甗形器初探」『東南考古研究』第３輯
林公務 2003「福建沿海地区出土石磉的分類」『東南考古研究』第３輯
盧美松・陳龍 2003『閩台先民文化探源』福建人民出版社